

インタビュー： 高山 智行さん

(震災遺構 仙台市立荒浜小学校 スタッフ/HOPE FOR project 代表)

荒浜小学校の音楽室に流れる音楽と、空に広がる色とりどりの風船—2012年以降、毎年3月11日には、荒浜小・七郷中卒業生による「HOPE FOR project」として、亡くなった方を偲び、思いを馳せる時間をつくることを目的に、花の種を入れた風船をリリースするとともに、荒浜小に縁のあるアーティストによる音楽演奏が行われています。荒浜の皆さんが、被災地の空に思いを寄せ、音楽の時間を共有することで、地元に住んでいた方、そして全国から心を寄せる方とつながる、大切な「場」が守られてきました。

HOPE FOR project 代表として様々な活動を行い、また日々震災遺構としての荒浜小を訪れる多くの方にスタッフとしてご案内を続けている、高山 智行さんにインタビューしました。

インタビュアー：高見 秀太郎（宮城教育大学教職大学院 院生／大阪府出身）

発災以降、震災遺構荒浜小に勤務されるまでの経緯を教えてください。

高山：荒浜小から内陸に1.5kmほどのところに実家があるのですが、ちょうど金曜日は仕事が休みで、私と祖父が家にいました。地震があつて、家の中はめちゃくちゃになったところ、30分ほどで母が車で帰ってきました。津波が来るとは思わず家で過ごしますが、灯油を買おうと海沿いのガソリンスタンドに車を走らせます。そうすると途中で、警察官に津波が来るから戻れと言われました。まだ他の車も走っているし、灯油も買えてないし…だけど、鬼気迫る表情だったことを覚えています。そこで引き返し、内陸のGSに向かっていると、田んぼに津波が走ってくるのが見えました。急いで家に戻り、母と祖父、足の不自由な近所のご夫婦を乗せて、道路に出たときにはもう津波が来ていました。そのまま七郷小（海岸から4.5km）に避難しました。

当時、七郷小学校には約3,000人が避難していました。寝るスペースもなく、座って過ごすような状況で…。翌日、祖父が体を患っていたこともあって、山沿いの親戚の家に避難しました。私だけ七郷小に戻って、何か自分でもできることはないかと思いましたが、結局何もできませんでした。別のコミュニティの中に、なかなか入っていけなかったこともあります。

ただその日の夜、Twitter は電波が入って見る事ができたので、「七郷小にいる人であれば、私が探しますよ」とツイートして寝ました。すると翌朝 100 件ぐらいの返信がありました。遠方の家族や友人の方々から「探してください」と送られてきていて、安否確認のようなことを始めます。

最初は無事だった人を報告できたりしていましたが、だんだん七郷小では見つけれなくなり、遺体安置所に行き、対面した方の訃報を、一個人が伝えることに迷いながらも、3月いっぱいぐらいしていました。

4月ごろからは、荒浜を含め被災地域の道端に落ちている写真を拾う活動をしました。誰も拾わず風化していく一方だったので、泥を落とし乾かして、当時避難所にいた区の職員に渡しました。その後、間もなくして返却会が開かれました。

自分の仕事も震災で立ち行かなくなりました。震災前から荒浜地区で事業をやっていた同級生家族から声がかかり、仕事を手伝い始めます。その中で、2012年3月11日が近づくにつれ、自分たちも何かできることはないか、と考えました。

そこで立ち上げたのが、3月11日に花の種を入れた風船を荒浜小からリリースする「HOPE For project」です。2012年3月11日は1700人もの方が集まりました。街の中に色が全くない中、一瞬だけ、空にカラフルな風景があって、思いを馳せる瞬間がありました。「3月11日に思いを寄せる場を開く」ことを目的に、それ以降の3月11日に毎年開催しています。

他にも、荒浜地区で活動をしている人を市街地で紹介する催しをしたり、荒浜にあるスケートパークと一緒に夏祭りをしたり、様々な活動をしてきました。

そんな中、2017年4月に荒浜小が震災遺構として開かれることとなります。震災前の荒浜を知っている人はたくさんいるけれど、3.11から現在に至るまでの荒浜について知っている人も必要だということで、仙台市からお声がけ頂き、働くことになりました。

もちろんそれぞれ様々な都合もあると思いますが、地元を離れる方もいる中で、3.11後も荒浜で日々を過ごし、活動をする「原動力」は何でしょうか。

高山：「悲しい気持ちになるから帰って来たくない」という同級生もたくさんいました。それも仕方ないことだと思います。しかし、もともとの住民の中に、何もなくなってしまったこのまちのことを、大切に思っている人たちもいました。私より一回り以上年下の子たちが「やっぱりこの海が好きだ」と言っているのを聞いたり、上の世代でも、住めないけどこのふるさとを大切に思っている人がいたり。海水浴の思い出がある人たち、県外から故郷を思っている人たち。そんな思いに触れて、そういった人たちが思いを馳せる場、集える場をつくるこ

と、これなら自分もできるんじゃないかなと思って。ほんとに目の前で今できること、気付いたことをやってただけです。

ビジネスを立ち上げたりは出来なかったけれど、このまちを大切にしたいという思いにふれたことが一番大きいんじゃないですかね。

特に子どもたちに伝えたいことは何でしょうか。震災後に生まれた子どもが増え、中学生でもほとんど覚えていない世代。でも3.11への思いはあって、心を寄せたいという声も聞きます。彼らがもう一歩踏み出すきっかけが、荒浜小にあるのではないのでしょうか。

高山：何よりも命を守ること。大きな津波はもちろん、その他の災害でも、まず命を守ることが第一です。そして、災害は今あるあたりまえの生活を奪ってしまうということ。3.11前は考えもしなかったことですが、今ある当たり前の暮らしを大切にしてほしいな、と思います。

震災から9年が経ち、人々の記憶から忘れかけている中で、荒浜地区で震災前から唯一残っている荒浜小が残り続けること、なおかつ活用されることも大事です。

荒浜も、震災前には当たり前の暮らし・営みがありました。どこの街にも、お祭りなどの伝統行事があると思いますが、災害があつて住めなくなったとき、こうした生活文化はどうやって残すのか？そういうことを考えるきっかけにもしたいです。

震災後からの歩みとして、HOPE For Projectの活動や、震災遺構として荒浜小学校が開かれただけでなく、農業を再建された方や新規就農者として遠方から移り住んで農業を始める若者など、行政と市民の垣根を超えた地域の取り組みが知見として伝わる部分もあるはず。3.11という点でなく、震災前と震災後を線で捉え、今に立って伝えることが大事だと思います。

市内に住む方は当事者だからこそ、あの時大変だったとわかっているから、荒浜小も別に見なくてもいいという方、もちろん心情的な理由で来ることができない方もいます。ただ、ここが残っていることで、関心が薄れてきている人たちが訪れたときにも、ふとまた想起するきっかけにはなります。何年かたった時にまた来てみて、あの日を見つめ直す機会になるためには、目で見て感じるものがないと難しいと思います。そのためにも、残しておかないといけな。

これからの若い世代にも関わってもらいたい。遺構はどうしても3.11にフォーカスして「悲しみ」を伝える場所になりやすいので、伝えられることの間口は広くしていきたいです。

やはりそう考えると、今の震災遺構荒浜小がもつ意味は多様だと感じます。

スタッフとして、来訪者とお話をされる中で、印象に残っていることなどはありますか。

高山：防災・減災、津波の脅威について、実際に足を運んでもらって、自分ごととして考える機会になることが大切です。今多くの県内外の小中学校の皆さんが校外学習などの一環として訪れて頂いています。でも、それだけではなく、もともとここに住んでいた人たちの思い出がある場所でもあります。

震災前の街の模型がある教室で、懐かしそうに過ごす方を見かけることもあります。そういった方にとっては、ここを遺構として捉えているのではなくて、自分たちの「母校」として訪れていることに気づかされます。そういう人たちが集う場所、帰る場所、よりどころという形で残っていくのはとても大切なことだと思います。地域の方から「ここに来てあたたかい飲み物でも飲みながら、変化する街並みを眺めて、ゆっくり過ごせる場所があったらいいな」という声もあります。遺構にそういう場所があってもいいと私は思います。

また、遠方からの関心が高く、県外・海外からの来館者も絶えません。九州・沖縄から荒浜を目的に訪れたと聞くと、本当に驚きます。南海トラフの想定域の方など、自分たちにできることを考えるために訪れたという声も多く聞きます。

3月11日に荒浜小に伺った際、まさに卒業生の皆さん、地域の皆さん、そして支援者の方、思いを寄せる方もみんなで集まり、「に」を召し上がりながらあたたかく過ごしているところを拝見しました。防災教育の場や、被災地であるということをお忘れ、こういった素敵なつながる場所があること、本当にいいなと思いました。

高山：「に」は荒浜で食べられていたお吸い物の精進料理です。地域の精進料理も作ることがなくなれば忘れられていくけれど、何かの機会があれば、こうした生活文化があったことを知るきっかけになります。

大切なのは、震災後たとえ住めなくとも、私たちの生活文化はこの場所にずっと地続きになってあるということです。生活文化を感じられるきっかけがあることは大事だと思います。夏の灯籠流しもそうです。

灯籠流しも、とても印象的でした。今ここにいる人も、いない人も、どこかでつながる場所があるよ、と言っているようでした。

高山：集団移転跡地活用事業も始まっています。事業者の方から説明を聞くと「インバウンドに力を入れていく」という話もあったのですが、「これから使う土地は、泣く泣く住めな

なくなった人の、生活があった場所だ」ということを忘れないでほしいです。荒浜地区には、賑わいの創出というテーマがありますが、ただの広大な空き地をどう使いますか、ということではないので…。

これから生まれる賑わいの根本に、荒浜の方々、思いを寄せてきた方々の思いがあるはずで、目的と手段が変わってはいけないということですね。環境が変わる中で、思いを寄せる大きなきっかけは、やはり高山さんはじめ荒浜の方々が語る「生の言葉」ではないかと思います。

高山：これから建物が建ち始めるじゃないですか。震災を伝えていくことも、今は何も無い土地だからこそ、「ここに街があったんだ」ということがダイレクトに見てわかりますが、新しい街ができれば伝えていくのが難しくなるのではと感じています。

今年度は、市内の小学校が全部で40校来りました。学年に関わらず、事前の防災学習において、先生方が児童の皆さんにこの場所をどう捉えてほしいとお伝え頂いているかが、大きく影響していると感じます。

年月が過ぎれば過ぎるほど、まずは足を運んでもらうこと、この場所に語る人がいること、そして伝える人が育つということが大事です。語る人が積み重ねてきたものも、継承されていないと、それこそ第一の目的である震災の教訓を伝えることができなくなってしまいます。

コロナ禍の中で今年の3.11も、周辺道路が渋滞するほど多くの人が集まっていて、やはり多くの方の思いを感じました。改めて思いを寄せるとはどういうことか、考えさせられました。

高山：こうした状況は9年前と似ていて、ネガティブなニュースが広がっているからこそ、人が思い寄せる場が必要なんじゃないかと思いました。今年は家族と家において、行ってみようと参加された人も多かったと思います。

コロナ禍の影響により、例年に比べれば来場者は少ないかなと思いましたが、3.11のHope for Projectは一つの思いを寄せる場所として開かれれば、人の多い少ないはあまり関係ないと考えています。災害危険区域となり人が住めなくなった街にまた「人が集えること」、それが街の価値であり、資源だと思います。